

清野小学校における防災管理・防災教育に充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立清野小学校

1 はじめに

本校は長野市南部の松代町内にあり、千曲川の右岸に位置する。校庭の東側には清野保育園があり、交流活動も行っている。学区内は、学校西側で千曲川堤防沿いに位置する1区（松代町岩野地区）、学校の南東で南側に山が連なる2区、学校東側で大部分は平地部の3区（ともに松代町清野地区）の3地区に分かれている。児童数は40名で、徒歩で集団登下校をしている（下校については、プラザ利用の児童を除く）。

学校及び学区のほぼ全体は、令和元年改訂の長野市洪水ハザードマップで5～10mの浸水予測が出されている。また、地域の南側には山が連なっているため、土砂災害警戒地域になっているところもある。この地域は水害常襲地域でもあり、過去には江戸時代の『戌の満水』（1742年）や昭和57年の台風18号災害で浸水被害を受けている。なお、戌の満水の際には、学区東端のやや小高くなった部分の上にある離山神社の境内に多くの人が避難したとの記録がある。令和元年の台風19号災害においては、学区内で大きな被害はなかったが、千曲川堤防の上端ぎりぎりまで水が迫り、多くの子どもたちが家族と共に親戚宅や指定避難場所へ避難した。

2 本校の防災教育について

昨年度、4年生の児童が、総合的な学習の時間を利用して、洪水が起きたときの行動を考えるための学習を行った。この学習は、自分たちの住む地域がハザードマップで赤く塗られ、浸水想定区域となっていることを知った子どもたちが、周囲よりも高く安全な場所はどこなのか考えるところから始まった。信州大学教育学部教授の廣内大助先生をはじめとした関係者の方々にご協力をいただき、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ（『フィールドオン』）を利用し、危険だと思われるところや安全だと思われるところの写真を撮ってアプリ上のマップに反映させるフィールドワークに取り組んだ。また、アプリに表示される標高を見ることで、避難に有効な高さがありそうなことを確認することができた。最初は水が流れることを意識して水路に目を向ける子どもが多かったが、何度かフィールドワークを重ねるうちに、浸水により見えなくなった時の状況を考えて写真を撮る子どもも出始めた。マップを完成させた子どもたちは、学習発表会の中で家族に向けて防災学習を通して学んだことや感じたことを発表した。



今年度は、防災教育を学校全体で、また地域と連携して行っていくことをめざし、学校安全総合支援事業の取組に参加することとした。

3 本年度の取組について

(1)防災教室 9月11日(金)

①ねらい

- ・いつ起こるかわからない自然災害の怖さを知り、自分たちが毎日通っている通学路にはどのような危険があるのか、万が一の場合にはどのような行動をとればいいのか考えることができる。

②参加者

- ・全校児童、保護者、学校評議員(4名)、学校職員
- ・参観日に設定し、親子で共に考えることができるよう登校班ごとに集まった。
- ・地域の方にも広く参加を呼びかけたかったが、新型コロナウイルス感染の懸念もあり、学校評議員に地域代表として参加していただいた。

③活動の概要

- ・学習の前半では、廣内大助先生より『災害からどうやって身を守るのか?』ということについてビデオ視聴によりお話を伺い、5年生児童が昨年度の学習を通して学んだ水害時に潜む危険性について発表した。
- ・通学路での危険や安全について、親子で考えてマップに記入し、それを発表し合った。
- ・防災教室終了後の週末を利用して親子で通学路をチェックするよう依頼し、感想等を含め後日ワークシートを提出していただいた。



④活動後の声

- ・昨年の台風19号では、大人が高をくくっていた。いつも大雨でも1mぐらい余裕があった。しかし、避難することとなり危機感を抱いた。今から学習をして危険なところなど考えていることに感心した。大人では全く考えられないところを子どもたちが見つけていて、すごいと思った。(学校評議員)
- ・改めて自然災害に特化して考えることで、具体的に危険な箇所が見えてきた。また「水害」と「地震」によって安全な箇所と危険な箇所が全く入れ替わる場所が多々あり、状況に応じて対応することの重要性を確認できた。(保護者)
- ・通学路には結構危ないところがあると分かったので、これからは意識して通りたい。ブロック塀からはなるべく離れて歩きたいと思った。5年生の発表を聞いて、水害では長芋畑との段差が危ないと感じたので気をつけたい。身の回りの危険な場所を知ることができてよかった。(児童)

⑤今後の展望

- ・全校児童が同じ課題意識を持って取り組むことができた。地震や土砂災害においては本校が指定緊急避難場所となること、水害時には学区内に指定緊急避難場所が一つもないことなどを踏まえると、地域と一体となって考えたり取り組んだりできる場を今後も設定していきたい。

(2)児童引き渡し訓練 10月6日(火)

①ねらい

- ・緊急時、各家庭に速やかに連絡が取れるようにする。
- ・緊急時の児童引き渡しの仕方を確認し速やかに引き渡しができるようにする。

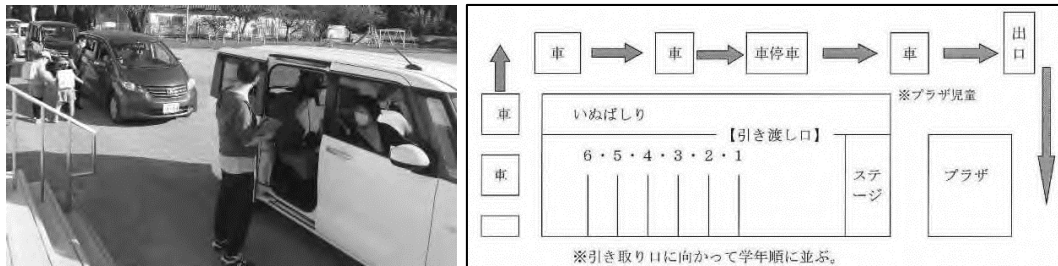
②参加者

- ・全校児童、児童の引き取り者(保護者、祖父母)、学校職員

- ・引き取り者は、年度初めに『緊急時児童引き取りカード』にて登録されている。

③活動の概要

- ・銀行襲撃の凶悪犯が地区内に逃げ込んだという想定で、児童引き取りの依頼を保護者にメール配信。
- ・全校児童は下校できる支度を整え、体育館で待機。
- ・メールを確認した保護者は引き取り者を決定し、引き取り者は学校へ向かう。メールの開封確認が取れない保護者には、電話連絡。
- ・体育館周辺をドライブスルー方式の一方通行とし、引き取り者であることを確認後、児童を引き渡す。



④活動後の声

- ・訓練なので、顔を知っていても引き取り者に児童の学年と名前の確認をした。祖父母の中には学年が出てこなかった方もいた。今後も継続して、知っている方が相手でも確認をしていく。(学校職員)
- ・メール配信の登録者を確認していただく。仕事の都合で、携帯を常に確認できない保護者もいるので、複数の登録を促す必要がある。(学校職員)

⑤今後の展望

- ・訓練自体はスムーズに行え、児童も引き取り者も落ち着いて行動ができた。今後は自然災害を想定していくことも必要と思われる。今年度、タイムラインの作成にあたり、水害時に引き渡しをお願いする判断基準を設定したので、今後の訓練では活用していきたい。

(3)清野保育園と合同の避難訓練 11月4日(水)

①ねらい

- ・地震発生時の避難の仕方を理解し、速やかに避難ができるように訓練する。
- ・地震発生時にどのように身を守るのか自己判断力を養う。
- ・学校内の危険箇所を見つけ、その対策を考えあうことで、一人一人の災害時の社会対応力を高める。
- ・保育園と同時開催し、同じ場所へ避難することで、災害時に連携を図れるよう訓練する。

②参加者

- ・全校児童、清野保育園幼児組園児、学校職員、保育園職員

③活動の概要

- ・時間の前半を防災学習の時間とし、各教室で『落ちてこない・倒れてこない・移動してこない』を基本に、身の守り方について事前学習を行った。
- ・低学年は各教室、4年は音楽室、5年は理科室、6年は家庭科室で行う。(毎年固定)
- ・非常ベルを地震発生の場合とし、各自が自分の身を守り、避難指示の放送を受けて全校児童は校庭へ避難。
- ・保育園も非常ベルの時間を合わせて訓練を行い、園庭に集合の後、幼児組の園児は本

校の校庭へ避難。その後、まとめの会まで合同で行った。

④活動後の声

- ・理科室にいる時に地震が起こったら、危ない実験道具などは水道に入れてからテーブルの下に隠れることが分かった。(児童)
- ・6年生の児童にとって家庭科室は初めてなので、とてもいい経験になった。机の下スペースが思ったより狭く、それぞれが工夫して隠れていた。(学校職員)
- ・お互いにいい刺激となるので、年に一度は保育園と合同で行いたい。(学校職員)

⑤今後の展望

- ・合同での訓練は今年度初めて実施したが、今後も合同の訓練を継続していきたい。また、今回は地震を想定したが、水害時の避難や引き渡しについても連携を図っていく必要がある。



(4)防災マップの作成

①ねらい

- ・危険箇所や安全箇所を1つの地図にまとめて見られるようにすることで、児童、保護者、地域の防災への意識を高める。

②活動の概要

- ・信州大学（廣内先生の研究室）の学生の協力を受け、防災教室で各家庭から挙げていただいた危険箇所や安全箇所を『大雨』『地震』『その他』に類別して web 上のマップに登録した。
- ・マップで示されている箇所やコメントをもとに、5年生児童が現地の写真を撮り、マップに反映させる。

③児童の様子

- ・『ブロック塀が倒れるかもしれない』『公民館に逃げる』といったコメントをもとに、友だちと相談しながら写真を撮った。後日、マップに載せる写真を選ぶためにそれぞれのグループが撮った写真を見比べた。子どもたちは、友だちや車、木と一緒に写っている写真だと、塀や建物の高さがより分かりやすくなることに気付き、写真撮影や写真選びの視点を広げることができた。

④今後の展望

- ・マップを完成させ、配布したり掲示したりすることで、一人一人の防災意識を高めるとともに、家族や地域の連携を深めていけるきっかけとしていきたい。

4 学校防災アドバイザー 廣内先生の指導より（一部を抜粋）

- ・（防災教室にあたって）地震、洪水と分けて考えるのではなく、自分たちの通学路にはどんな危険が潜んでいるのか、複合的に考えていける視点を持つことが必要。
- ・学校が避難所となることを具体的に想定したい。避難所開設キットを見てもらうことも、保護者や地域に向けたよいきっかけとなる。

5 まとめ

- ・学校安全総合支援事業としてはまだ1年目だが、昨年度の学年としての取り組みから、学校全体としての取り組みへと広げていくことができた。今後は学校としての取り組みを、地域へと広げていきたい。

（文責 教諭 和田卓也）

長野市立城山小学校における防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業１年目の実践 —

長野市立城山小学校

１ はじめに

本校は、明治６年に「第一番長野学校」として創立し、今年度１４７年目を迎えた歴史と伝統ある学校である。

善光寺に隣接した本校の周辺には、長野県信濃美術館、気象庁長野地方気象台、少年科学センター、城山動物園、城山公園など多くの文化施設があり、善光寺の鐘の音が響く落ち着いた雰囲気の中に校舎がたたずむ。善光寺節分会や善光寺初笑い・善光寺木遣りへの参加、善光寺大本願雅楽の鑑賞など、善光寺の伝統行事から学ばせていただく機会も数多い。また、コミュニティスクールの活動も活発で、多くの学校支援ボランティアの皆さんに毎日の学校を支えていただいている。本校から徒歩１０分ほどの距離にある信州大学教育学部からも、年間通して日常的にボランティアに入る学生がいる。

学区は、善光寺周辺の市街地から、飯綱高原の山間地までと広く変化に富んでおり、スクールバスを利用して通学する児童もいる。長野市土砂災害ハザードマップでは、校区内に土砂災害特別警戒区域となっている場所がいくつかある。

学校規模は、全校児童３８５名（令和３年１月）、特別支援学級２学級を含めて１６学級である。学校教育目標として、「世界の人となる ～桜と鳩と石畳～」を掲げ、世界に通用する一流の人となることを目指し、日々の学校生活に取り組んでいる。

２ 長野市立城山小学校の防災体制について（概要）

（１）昨年度までの防災にかかわる主な計画

① 避難訓練〔時期 主な内容〕

- ・ 第１回避難訓練 〔４月 避難経路の確認〕
- ・ 不審者対応研修（職員） 〔５月 不審者対応の基本的内容の研修〕
- ・ 引き渡し訓練（１学年） 〔５月 保護者への児童引き渡しの確認〕
- ・ 第２回避難訓練 〔８月 地震を想定した訓練〕
- ・ 第３回避難訓練 〔１０月 休み時間の避難訓練 消防署立ち会い
消火訓練〕

② 安全点検（月初めに実施）

③ 危機管理マニュアルの修正

④ 家庭、地域、関係機関等と連携した防災教育の推進

- ・ 外部機関と連携した防災に関する授業を教育課程に位置付け実施。
- ・ 地域と連携した避難訓練や防災に関する懇談会等を行ったり、参観日に防災に関する授業や避難訓練を実施したりするなどし、学校の防災の方針を保護者や地域住民との間で共有できるようにする。
- ・ 教職員の学校安全に関する資質・能力の向上を図る研修を実施。
- ・ 外部機関による出前講座や外部講師などを積極的に活用。

3 学校防災アドバイザーの関わり

- (1) これまでの本校の防災教育における課題
- ・前年度踏襲の形式的な避難訓練となっており、児童自身が自ら考え、判断する訓練内容となっていなかった。実施時間、実施内容や方法等について、実際場面に生きる実践的な訓練としていく必要がある。
 - ・長野県内や長野市内でも、近年、大きな自然災害が起こっている。学区内に大きな河川等がない本校児童には、だからこそ自分事として防災意識を高めるような学習の場を積み上げていきたい。
 - ・前述したこれまでの防災関係の計画④（家庭、地域、関係機関等と連携した防災教育の推進）について、具体的に取り組むことができないままだった。
- (2) 今後、本校の防災教育として大事に位置付けたい視点
- これまでの本校の防災教育における課題を踏まえ、今後、次の3点について位置付けていきたい。

- ① 災害に関する知識や理解を深める
- ② 災害発生時に、自らの安全を確保するための判断力や行動力を身につける
- ③ 自他の生命の尊重や、地域の安全のために貢献する心を育てる

- (3) 学校防災アドバイザーの支援を生かして

3 (2)に記載した視点で、本校の防災教育を見返し、児童が自他の命を守ることに直結する安全教育の充実を図るため、今年度より本校も学校防災アドバイザー派遣・活用事業に参加することとした。

今年度は、「① 災害に関する知識や理解を深める」面で、気象庁長野地方気象台の大橋勇治 次長、金子由里絵 気象情報官、松沢正孝 地域防災官に、気象台の専門性を生かし、児童対象の出前授業を実施していただく。また、「② 災害発生時に、自らの安全を確保するための判断力や行動力を身につける」面では、信州大学学術研究・産学官連携推進機構 本間喜子 助教に、本校の避難訓練を視察していただき、ご指導いただくこととした。

- (4) 今年度の取組

【気象庁長野地方気象台の学校防災アドバイザーによる出前授業】

- ① 目的
 - ・理科の学習で台風について学んだ5年生及び地震による土地の変化について学んだ6年生を対象に、長野地方気象台の学校防災アドバイザーから、その専門性を生かした台風や地震に関する防災対策の出前授業をしていただくことにより、学んだことを防災の視点から見直し、正しい知識に基づいて防災意識をより一層高める。
 - ・校区内にある長野地方気象台の方と連携することにより、防災の視点から身近な資源の活用を考えることができるようになる。
- ② 講師

5年生対象の出前授業：気象庁長野地方気象台 松沢正孝 地域防災官
6年生対象の出前授業：気象庁長野地方気象台 金子由里絵 気象情報官
- ③ 実施日

5年生対象の出前授業：令和2年11月26日（木）
6年生対象の出前授業：令和2年12月17日（木）

④ 出前授業の主な内容

○ 5 年生対象の出前授業

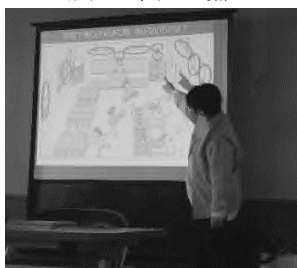
- ・ 台風の進路やそれに伴う天気の変化
- ・ 台風の大雨や強風によって起こる災害
- ・ 台風に対する備え
- ・ 落雷から身を守るには



台風について地域防災官から学ぶ5年生

○ 6 年生対象の出前授業

- ・ 地震発生のしくみ ・ 緊急地震速報とは
- ・ 地震に対する備え



6年生に地震への備えについて説明する気象情報官



風について体験的に学ぶ出前授業

【信州大学学術研究・産学官連携推進機構 助教 本間喜子 学校防災アドバイザー
による第3回避難訓練（11月26日 休み時間に実施）での指導】

① 係職員・教頭への事前指導（令和2年11月10日）

- ・ 他校の事例だが、実際に地震があった際、避難訓練で教わったことが正解であると考え、外で遊んでいたのに教室に戻り自分の机の下に隠れようとした児童がいた。真面目な子ほどそういう傾向にある。「なぜ理科室側ではなく、調理室側の通路を通って校庭まで行くのか」など、理由を考えながら避難訓練に臨むことができるようにすると、本番に生きる訓練になる。

② 指導内容を受けて取り組んだこと（改善した点）

○ 児童への事前・事後の指導内容の見直し

〔見直した児童への事前指導内容〕

- ・ 今回の避難訓練は、休み時間の避難方法を学ぶ本年度初めての訓練であるため担当職員が駆け付けるまで座って待機することになっているが、実際に火災が起きた際は、高学年の児童を中心に、自分たちで判断して安全に避難しなければならないことがあること。
- ・ 今回の非常災害時集合場所は、理科室（校舎東側に位置する）が火災現場であるため、各階の西側に集まることになっているが、実際の火災発生場所に応じて集合場所は変わることがあること。
- ・ 実際に火災が起きたら、校庭までの避難経路も訓練と変わることがあること。
安全に避難することが第一優先となる。



状況に応じて安全第一に避難

○全校統一の振り返りシートを用いた事後指導

・第3回避難訓練のめあてにかかわる内容

「放送を静かに最後まで聞くことができたか。
「お・は・し・も」を守って、避難することが
できたか。下級生の面倒を見ること（4～6年
生の言うことを聞いて避難）ができたか。集合
場所にすばやく移動することができたか」に
加えて、「非常ベルを聞いたときどこにいたか」
「どこに集合したか」についても記入できる
ようにし、事前指導内容にかかわって個々の動きを振り返った。



訓練後にテレビ放送で、児童に振り返りの話をする防災アドバイザー

○避難訓練後の指導内容を受けた避難訓練の計画の見直し

- ・非常災害時集合場所に集まり校庭に行くことはせずに、児童が自分で放送の指示に従って避難するようにする。児童自身が自分で考え、判断することにつながるるとともに、集合場所の児童の掌握に必要な職員が減る。職員は担当する階に児童が残っていないかを確認してから、集合場所の校庭に行くようにする。なお職員が校庭に行く際は、担当校舎の職員と一緒にいくようにする。
- ・避難する際に職員が校舎に児童が残っていないか確認するため、基本的には行方不明者はいないことを想定しているが、万一のことを考えて確認係（行方不明者の捜索をする係）は残し、防災組織に位置付ける。
- ・年3回の全校避難訓練に限らず、朝の時間等を使いクラス単位で避難訓練を行う機会を何回か設けるなど、短時間で反復して実施できる訓練を取り入れたい。

4 事業の成果及び今後の課題

(1) 気象庁長野地方気象台の学校防災アドバイザーの支援

① 成果

- ・理科の学習内容と関連付け、外部の専門家から直接、台風や地震にかかわる防災について学ぶ機会を設けたことで、児童は関心をもって意欲的に学び、正しい知識を得ることの大切さや、いつ起こるか分からない自然災害であっても事前の準備や避難行動によって災害を軽減できることを実感することができた。

② 課題

- ・防災教育の視点から教科横断カリキュラムの編成を行い、年間計画に基づいて意図的、計画的に指導できるようにする。

(2) 信州大学学術研究・産学官連携推進機構 本間喜子 学校防災アドバイザーの支援

① 成果

- ・より実践的な防災訓練を目指して、自校の避難訓練を具体的に見直し、来年度の防災教育の計画につながる助言をいただくことができた。学校防災アドバイザーの支援が、児童・職員の防災意識を高めるよい契機となった。

② 課題

- ・児童が様々な場面を想定した避難訓練を経験し、状況に応じて自ら考え判断する力を培うことができるよう、小学校6年間を見通した防災教育カリキュラムの整備を進めたい。

※ 本事業1年目の参加にあたり、防災教育の充実に向けた本校の第一歩目となる取組を支え、ご指導いただいた学校防災アドバイザーの皆様、市教委担当指導主事の先生に感謝申し上げます。

（文責 教頭 水倉美和子）

学校防災アドバイザー派遣・活用事業による「引き渡し訓練」の改善

— 令和元年19号台風の被災経験を活かした防災体制の見直し —

長野市立豊野東小学校

1 はじめに

豊野東小学校は長野市北部にある全校児童 148 名の単級の学校である。本校の近隣には千曲川や鳥居川、浅川が流れ、台風などの大雨で河川が氾濫すると浸水被害が発生することもある。特に昨年（令和元年）10月13日（日）に台風19号の豪雨のため近隣地区で千曲川の堤防が決壊し、大規模に氾濫した際には、学校自体に浸水等の被害はなかったものの、学区内では数軒の児童の家庭が床上・床下浸水の被害を受けた。また広範囲に出された避難指示によって本校体育館も避難所となり、多くの被災者が2ヶ月ほど避難生活を送ることとなった。

台風の襲来と避難所の開設が土曜・日曜日だったため学校は休業日だったが、これが普通登校日であったら、学校として児童の安全確保や家庭への引き渡しなど重要な判断と行動が求められたはずである。この台風19号災害の経験をもとにして改めて本校の危機管理マニュアルやこれまでやってきた避難訓練・引き渡し訓練、避難所開設の対応などを見直したとき、現実的でない部分が多々あることに気づかされた。

また、日頃の児童への安全指導も、災害や防災についての現実に即した科学的な理解や知識・判断力などを十分に育ててきたのか、大きな不安が残った。さらに教職員の知識や理解も十分とは言えない面があった。そこで、本事業を活用して学校防災アドバイザー（信州大学 本間喜子先生）から次の点のご指導をいただき、防災体制の見直しをはかりたいと考えた。

- (1) 水害時の引き渡し訓練のあり方
- (2) 水害・地震などの自然災害と防災への児童・教職員の知識・理解・技能の向上
- (3) 本校の防災マニュアルの改善

2 長野市立豊野東小学校の防災体制について（概要）

- (1) 本校の従来の引き渡し訓練の概要
 - ①10月初旬に地震対応の避難訓練と同時に実施する。
 - ②主として地震発生時を想定し、児童を校庭に避難させ、保護者にはPTA配信メールで迎えを依頼し、徒歩（自家用車を学校に乗り付けない）で迎えに来てもらう。

雨天時は体育館を引き渡し会場とする。

- ③校庭に割り当てた学年毎の引き渡し場所に児童を整列・待機させ、担任が「引き渡しカード」の記載内容に基づいて保護者に引き渡す。
- ④近隣の豊野ひがし保育園が避難場所として本校を指定しているため、保育園も同日同時刻に体育館を使って行う。

(2) 台風 19 号の経験によって明らかになった従来の引き渡し訓練の課題

まず、本校では水害を想定した引き渡し訓練をしてこなかった。特に水害時では実際の経験から次の点についての配慮が必要となることが分かったが、検討されていなかった。

- ①体育館が避難所になって学校の活動で使えなくなる。また校庭にも避難者や緊急物資搬入の車両が入ったり、場合によってはヘリコプターが離着陸したりする場合もあるため、体育館や校庭に児童を整列させて引き渡すことは不可能である。
- ②水害時は基本的に雨天であるため、迎えに来る保護者は兄弟姉妹関係もあって自家用車で来校する。場合によっては子どもを引き取った後、体育館の避難所に入ることもあるので、車や歩行者の安全で効率よい動線確保が必要である。

(3) 改善した引き渡し訓練の計画方針

- ①児童を教室で待機させ、保護者に教室で引き渡しを受けてもらうようにお願いする。年上の子から迎えてもらうようにする。保育園児の迎えはその後にしてもらう。
- ②教室で児童を待機させ、担任が教室入り口で引き渡しカードに基づき保護者に児童を引き渡す。
- ③正門から校庭、校庭出口に職員を配置し、迎えの車が正門から昇降口の前を通って校庭に入り、所定の場所に駐車する。また児童を迎えたあと車で校庭出口から出るような、全体として一方通行になる動線を確保する。
- ④雨天で校庭の土が濡れてぬかっている校庭に駐車してもらって実施する。



図 1 正門から校庭まで車両の動線確保

(4) 実際の引き渡し訓練の様子（10 月 19 日）

- ①保護者の車が正門から入り、職員の案内指示に従って校庭の所定の場所に駐車して保護者は教室に児童を迎えに行った（図 1）。
- ②教室へ行った保護者は教室入り口で担任が持つ引き渡しカードで確認を受け、児童の引き渡しを受けた（図 2）。
- ③年上の児童から順に引き渡しを受けた保護



図 2 教室で担任から保護者へ引き渡し

者は、昇降口から児童とともに校庭の車に移動して帰宅した（図3）。

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 引き渡し訓練後の本間先生からのご指導

①訓練全体はスムーズに行われていた。ただし児童昇降口前で、車と歩行者の動線が交差してしまっていた（図4）。雨天時は特に歩行者は焦るので配慮が必要である。

②教室で待っている児童は全体的に落ち着いていたが、本当の災害時は担任も保護者もぴりぴりとした雰囲気になり、児童もそれを感じて落ち着かなくなるため、教室で自由に行っているより本を読んだり学習したりするなど何かすることがあるとよい。

③迎えに来る保護者は、日頃から学校に出入りする父母とは限らない場合があるため、校内の指示や掲示板などを使って引き渡しの会場図など掲示しておくとうい。

④保育園児など幼い子は保護者の姿を見ると駆け寄ってしまうことがある。一つの場所に集めたら後ろ向きにさせ、保護者は児童の後方から近づけるような隊形を作るとよい。

(2) 地域と連携した引き渡し訓練について

事後指導で同席していただいた住民自治協議会職員からの指摘を受けて、次の点のご指導をいただいた。

①校庭の駐車は参観日などで駐車する場合などを使って日頃から保護者に習慣づけをしておく。

②職員が来校者の駐車案内誘導をする際のパターンを作っておくとうい。

③児童の緊急連絡カードと引き渡しカードを同じものにしておくなど、効率化をはかるとよい。

④地勢から本校より豊野中学校の避難引き渡し先になるため、豊野中学校に兄弟がいる場合、保護者は中学校に行ったあと本校に来るようになる。避難や引き渡しの指示は、豊野中学校と連携をする必要がある。千曲川や鳥居川だけでなく、中学校に直接影響する浅川の警戒情報も必要になる。

(3) 防災全般について

①児童や家庭が、自宅がハザードマップのどこに位置付いているのか、いざとなった



図3 昇降口から校庭の車へ移動



図4 車両と避難者の動線が交差図2

らどのように対応し避難するのかを十分に知っておく必要がある。住民自治協議会が配布したハザードマップは児童にも知らせていく。

- ②各地で災害時の「タイムライン」を作成している。本校でも実施するとよい。また災害用伝言ダイヤル 171 を日頃から使えるようにしておくことがよい。
- ③避難所設営について、学校だけで困難が生じた場合は住民自治協議会などを通じて地域住民に支援を求めることができる。
- ④児童の心のケアは、長期間必要。子によっては防災無線が鳴るとこわい・この橋を渡るとこわさを思い出す・雨がこわい等の気持ちが続くことがある。カウンセラーも使っていくとよい。

4 事業の成果及び今後の課題

(1) 事業の成果

- ①令和元年の台風 19 号被害をきっかけに水害に対する備えに地域を挙げて関心が高まっていた中で、学校防災アドバイザー本間喜子先生のご指導を受けながら本校の引き渡し訓練を根本的に見直すことができ、大変ありがたかった。特に実際の被災時をリアルに想定させていただくことができたのは良かった。
- ②防災の意識が地震に限定され、本校内の対応だけに固定されがちだったこれまでも振り返り、豊野中学校・豊野西小学校との連携の必要性が意識づけられた。

(2) 今後の課題

- ①今後は、豊野地区に関わる災害と防災についての科学的な理解と、それに基づく危機管理マニュアルの見直しをはかっていきたい。
- ②豊野地区にある本校・豊野西小学校・豊野中学校の連携と、住民自治協議会を窓口にした地域住民との連携による防災体制を具体的につくるにはどうしたらいいか引き続きご指導をいただきたい。

5 まとめ

令和元年 10 月の台風 19 号による未曾有の大災害を直接体験し、学校としてこれまでいかに平穏な毎日に寄りかかってきていたのかを痛感させられた。そして自校の防災体制をどこから再構築したらいいのか困っていたとき、本支援事業で信州大学の本間喜子先生からご指導をいただき、今年度は、これまで前年踏襲で続いてきた引き渡し訓練のあり方や実施方法を再検討して現実に即した内容に改善することができた。さらに近隣校や地域との連携も見直すきっかけをいただき、方向も見えてきた。

児童の命や生活を守るという最も大切な点について、学校職員だけで考えるのではなく、専門家のご指導や地域との連携の必要性を強く感じた。ご指導くださった本間先生に感謝を申し上げたい。また、きっかけとなった本支援事業に感謝するとともに、今後も引き続き本校の防災体制を改善していきたい。

(文責 教頭 橋澤宏文)

豊野西小学校における防災管理意識の向上、
防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立豊野西小学校

1 はじめに

本校は、開校から 130 年をこえる、歴史ある学校である。児童数は 343 名、各学年 2 クラスずつの規模である。学校の周りにはりんご畑やぶどう畑が広がり、春の芽吹きから順に、季節ごとに姿を変えていく果物の様子を、間近で見ることができる。特に北西側は丘陵地となっており、その斜面に広がるぶどう棚の間は、低学年の散歩コースとなっている。地域の方は、子どもたちの活動を温かく見守ってくださり、ぶどうやりりんごがなる頃には、「おいしいよ。食べてみてよ」と、その場で収穫したものを渡してくださることもある。

学校の南側は平らな土地が広がり、ベランダからは、しなの鉄道北しなの線や北陸新幹線が行きかう様子が見られる。両線の間には浅川が流れ、新幹線のさらに南側には、ゆったりと千曲川が流れている。

普段は穏やかなこの千曲川は、令和元年 10 月の台風 19 号の大雨により水かさが増し、近隣の地区である穂保で堤防が決壊してしまった。その水は、新幹線の線路を超えて豊野地区までも押し寄せ、浅川を飲み込み、本校の学区を飲み込み、学校のすぐ前の道路まで押し寄せたのである。全国放送で幾度となく扱われた新幹線の基地は、まさに本校から見える景色と同じであった。本校自体の実害はほぼなかったが、当日の夜から、学校の体育館や校庭、校舎内の教室も避難所となった。町の様子は一変し、本校児童の約 4 分の 1 が被災してしまった。しばらく、通常のように学校生活を送ることができなくなってしまったのである。

2 長野市立豊野西小学校の防災体制について（概要）

突然の災害に見舞われる前から、もちろん防災マニュアルも作成されていたが、学校が避難所となり、学区内が水浸し、泥だらけになることまで想定していたかと言われると、返事に窮するところがある。学校で通常の教育活動ができなくなるだけでなく、学校への通学路も泥だらけで、衛生面を考えると安心して歩くこともできないのである。自宅を失ってしまった児童もいる。教員も全員が学校に駆け付けることが難しいことも分かった。「休みの日だったら」「授業中だったら」などの様々な状況に対応できるような準備をしておかなければならず、ハード面、ソフト面の課題が一気に押し寄せてくることを実感した。

また、避難訓練も定期的に行っていた。その都度、職員も児童も真剣に向かうことができていたが、避難する際の想定はあまり大きく変わることはなかった。また、「今日は避

難訓練がある」ということは周知していたので、形式的になっていたことがあるかもしれない。「自分の命を自分で守るために、どんな時にどんなことをすればいいか」と、自分事として訓練に臨んでいたかには疑問が残る。

避難訓練後について、学級ごとに振り返りを行っていたが、「静かにできたかな」「『おはし』に気を付けて逃げられたかな」など、行為の振り返りを行うことが多かったように思う。現在の状況を把握し、どうしたらいいか考えた上で、動くことができるような訓練が不足していたようだと考えている。

台風以降、学校が再開した際、衛生的な生活を確保するために、日本赤十字社の方が指導をくださった。これが非常に有効で、子どもたちは大人に言われなくても自ら手指消毒に取り組むようになったのである。「これは自分の命を守るために欠かせないことである」という視点が持てるようになったと考えている。

3 学校防災アドバイザーの関わり

- ・今年度、本事業に参加させていただくに当たり次のようなことを考えた。

【防災管理に関して】

- ・様々な状況に対応できるような日々の取り組み

【防災教育に関して】

- ・自分の命を自分で守ることのできる自立した児童の育成

- ・実際に、次のような取り組みを行った。

(1) 避難訓練の「例年通り」からの脱却

① 信州大学 廣内大助先生からのアドバイス

- ・「学校の防災管理の手引き」や教頭会研修の資料を見ながら、他校の取り組みを確認。
- ・すぐに取り組めること、長期的に取り組むことの確認。
- ・避難訓練では、様々な想定を子どもに体験させることで、実際に動けるようになることを確認。
- ・避難訓練では、先生方も思い切って体験してみることの大切さを確認。

② 職員間で、実際の状況により近い形での訓練の大切さを共有

③ 「児童には知らせない」「防火扉が閉まっている」訓練を実施

- ・想定していなかった「逃げ遅れた児童あり」「搜索」への直面
- ・防火扉をくぐる際の課題

④ 訓練の振り返りから出された、職員の「自分事」の課題

⑤ 避難誘導時の職員の配置について、新しい案を職員が検討

⑥ 年度途中ではあったが、避難誘導時のよりよい引率方法の確立

⑦ 年間に実施する訓練内容の見直し

⑧ 来年度の計画に確実に入れていくことの確認

(2) 自分で「考える」学習を通して

①防災教育の教材活用

- ・「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん」を用いた授業
- ・市の防災担当の方を招いての授業



4年生

- ・大きな地震があったとき、私たちの暮らしを守るために、だれがどのようなことをしているの？
- ・私たちにもできることはあるのですか？

- ・家庭を巻き込んだ授業

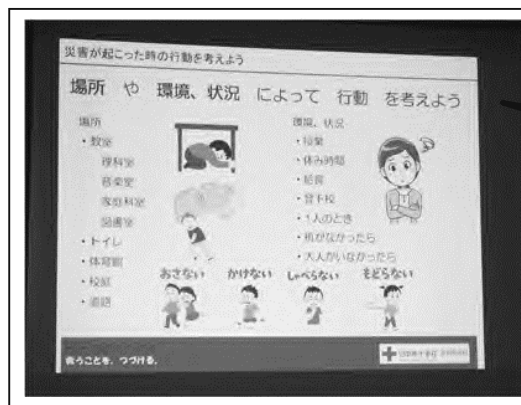


5年生

- ・もしもの時のために、皆さんのうちでは、どんな備えを準備していますか？
- ・今日の学習のことをおうちで話して、自分の家の備えを確認しよう。

②教職員、地域の方が一緒に研修を行う

- ・日本赤十字社 長野県支部 小柳 由佳さんを講師にお招きし研修会



学校評議員、公民館長、住民自治協議会の皆さんも共に研修を行う

4 事業の成果及び今後の課題

【成果】

- ・廣内先生、小柳先生という専門家の方からのアドバイスをいただいたことで、思い切って取り組んでみる事ができた。
- ・年度途中にも関わらず、緊急時の児童の誘導體制を見直したことは、より安全性を高めることにつながると考える。
- ・実際にありそうな想定で避難訓練を実施したことで、職員にとっても「自分事」の課題が生まれ、イメージを持って訓練に当たる事ができた。
- ・防災教育については、資料を紹介していただいたことが、授業を行うきっかけとなった。まずやってみることで、次に何をすればよいか考えることができる。

【課題】

- ・継続的に授業を行ったり、職員の防災意識を持続させたりすること。
- ・地域との連携の取り方

5 まとめ

今回、アドバイザーの先生方がいてくださったおかげで、視野が広がり、イメージ豊かに訓練に臨んだり実際の姿を考えたりすることができるようになった。やってみて初めて課題も見つかってくる。積極的に取り組んでいくことが、万が一に備えることになると思う。

今回は、地震と火事の想定が多かったが、本校が向き合わなければいけない「土砂災害」や「水害」にも、想定を広げていきたいと考える。

(文責 教頭 藤澤直子)